

CA1
EA947
B71

#59 Mar. 1985

DOCS



特集・大西洋沿岸地方

1985年3月
No. 59

ISSN 0389-1852

トピックス——2

Dept. of External Affairs
Min. des Affaires extérieures
OTTAWA

APR 29 1985
AVR

RETURN TO DEPARTMENTAL LIBRARY
RETOURNER A LA BIBLIOTHEQUE DU MINISTRE

大西洋沿岸地方

ニューファンドランド州——4

鉱物資源と水力の宝庫——5

プリンスエドワード・アイランド州——6

世界的なポテトの産地——7

ニュー・ブランズウィック州——8

日本向けに魚介類——8

ノバ・スコシア州——10

石油と天然ガス——11

カナディアン・ロッキーが世界の「遺産」に——12

トロントにドーム型巨大スタジアム——12

カナダ便り/イヌイットの現在●岸上伸啓——13

カナダの首相②アレクサンダー・マッケンジー●ジョン・セイウェル——14

各地の新聞から——16

編集後記——16

LIBRARY E A / BIBLIOTHÈQUE A E



3 5036 01030039 3



60984 81800

Bulletin Canada

発行  カナダ大使館

トピックス

◆◆ とも義足の青年が挑戦 がん撲滅のためカナダ横断

十二才のときにがんのため片足を切断した青年が、がん撲滅キャンペーンでカナダをひた走っている。青年の名はステイブ・フォンヨ。フリティッシュ・コロンビア州バーノン出身で、十九才。

Canapress



極寒の中、ウィニペグ近辺を走るフォンヨ君。(85年2月)

めようと、義足で大陸横断マラソンを試みたテリー・フォックスが、病巣転移のためにマラソンを中断した地点だ。

これまでに沿道の人々や団体から、五十万ドルをこえる寄付申込みがあった。残った道程は、西部カナダからフリティッシュ・コロ

ンビアまで二千七百七十五キロ。最終地点に到着するまでに、さらに多くの募金が寄せられるものと思われている。

フォンヨ君は、クリスマス家を家族と過ごしたあと、一月三日、厳しい寒さの中を再び目的地に向けて走りはじめた。毎日朝七時から十時間も走って、バンクーバーに到着するのは四月の見込みだ。

◆◆ 三井物産、テレガイドを導入 将来は大阪など各地にも

三井物産が、テレドンを使ったビデオテックス情報サービス「テレガイド」を東京で設置するライオン・ソフトウェア会社のライオン・ソフトウェア・カナダから取得した。

テレガイドは、コンピュータ端末を利用して、ニュース、天気予報、レストラン案内などの情報を簡単に引き出せるようにしたシステムで、トロントではホテルやショッピング・センターに数百台設置され、米国でもすでにサンフランシスコ、スクラメント、ロサンゼルスで利用されている。日本では東京・赤坂の一ツ木通りと横浜駅近くの地下街に設置されているが、本格導入はこれが初めて。三井物産はすでに、ソニーなど

と共同出資で「東京テレガイド」を設立し、五月から東京のホテルや商店街に五十台の端末を設置するという。三年間に五百台にふやし、その後は大阪、名古屋、福岡などにもテレガイド網を拡大する予定。

◆◆ テリドン、国際標準規格に 国連の下部機関が公認

カナダが開発した文字図形情報システム「テリドン」に基づくコード規格NAPLPS(ナプリブス)が、国連の専門機関である国際電気通信連合(ITU)の下部組織・国際電気通信諮問委員会から公認された。

これにより、テリドンが北米だけでなく、他の地域でも利用される目途がついた。同時に、ビデオテックス・オペレーター、情報提供者、機器メーカー、それに利用者も、規格が不意に変わったためにナプリブス(テリドン)製品が使えなくなる、という心配をしなくて済む。

国際電気通信諮問委員会は、テリドンと同時に、日本のキャプテン、ヨーロッパのCEPT規格も公認した。

◆◆ 一千年前の住居跡 ロッキーマン山中で発見

保養地として世界的に有名なアルバータ州バンフの近くで、およそ一万年一千年前のものと思われる

住居跡が発見された。

住居跡は円形で、直径が三・二メートル、中央にいろりがある。この家が建てられたのは、最後の氷河時代が終わった直後で、当時のアルバータ州には二千ないし五千の人々が住み、マンモスや、ジャイアント・バイソン、長さ二メートルにもおよぶビーバーなどが徘徊していたものと想像されている。

アルバータ考古学会の上級研究員ジャック・プリング氏によると、この住居跡はこれまでに米国大陸で発見された中ではおそらく最古のものだろう、という。

アジアから北米大陸に人が渡ったのは、二、三万年前だといわれている。

◆◆ 継続運動で関節治療に効果 トロントの病院がCPMを開発

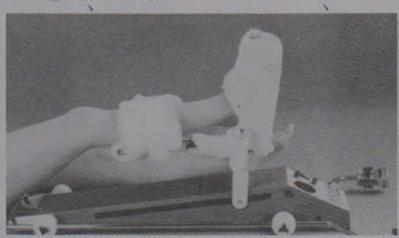
トロント小児病院の整形外科医スレーター博士が考案した「継続受動運動」(CPM)が、手術後の関節の痛みや異常なはれを和らげたり、退行性関節炎を予防するのに効果があることが分かった。

スレーター博士は、一九六九年以来、CPMの研究に取り組んできた。九年後、動作と治癒に強い関係があることを発見。手術を受けたあと、ギプスで固定したままにした関節は、新しい軟骨組織が全くできなかつた。むしろ、瘢痕組織が既存の軟骨の割れ目を埋めるため、そこから関節炎になつて

しまう。しかし、少なくとも一週間、継続的な受動運動で治療された関節は、退行性関節炎の徴候をあまり見せず、しかも多くの場合、新しい軟骨を作りだしていた。

オンタリオ州スカバラにあるトロント・メデイカル社では、膝、肘、肩、指関節用のCPM機械「モビリム」を開発した。

モビリムは、膝や足首大腿部などが患者に合わせた速度と範囲で動かせるようになっており、手術後一週間以上これをとりつけて自由に動き回っていると、それだけ回復が早いという。



膝や足首などを動かす受動運動器。

◆◆ 太平洋財団の初代会長に 外務省の貿易担当次官補

昨夏設置されたアジア太平洋財団(理事長ジョン・ブルック氏)の初代会長に、外務省国際貿易担当次官補のレイモンド・アンダーソン氏が就任した。

アンダーソン氏は、アルバータ州の出身で、一九五七年に連邦政府の通商部に入ってから、サンパウル、ロサンゼルス、マニラ、台北、ホストンなどで商務官、ロサンゼルスで総領事、駐オーストラリア高等弁務官などを歴任した。

石油発見で期待される躍進

大西洋沿岸地方



カナダの大西洋沿岸に位置するニュー・ブランズウィック、ノバ・スコシア、プリンス・エドワード・アイランド、ニューファンドランドの四州は、植民の歴史が古く、景観も素晴らしいが、日本では一般になじみが薄い。ようやくプリンス・エドワード・アイランドが、小説「赤毛のアン」の人気のおかげで、特に女性の間でよく知られているといてであろう。

日本であまり関心がないのは、距離のためだけではない。ラブラドルの鉄鉱石など、一部の物品を除いて、これまで日本とのかわりがそれほど無かったのも一因だ。面積にしてカナダ全体のわずかに六パーセント、人口では一〇パーセントという大西洋沿岸地方の主な産業は、漁業、林業、鉱業、それに農業だが、ブリテッシュ・コロンビアなどと比べて規模が小さく、しかも貿易の大半は米国やヨーロッパを相手としていた。

しかしながら、近年は、鉄鉱石に加えて、紙パルプや本マグロ、ブルーベリーやピートモス（泥炭コケ）、それにニシンやカニ、ロブスターなどの魚介類が日本にも大量に入るようになり、大西洋沿岸地方はぐっと近い存在になった。

大西洋沿岸地方は、いま、ひとつの曲り角にきている。これまでカナダで最も貧しく、最も失業率が高く、過疎化の著しかったこの一帯の沿岸で、石油と天然ガスが発見されたからだ。開発はまだ緒に付いたばかりだが、人々はようやく自分たちにも運が向いてきた、と大きな期待を寄せている。

ニューファンドランド州

海底油田に

大きな期待

ニューファンドランド州は、同名の島とベルイル海峡をへだてた大陸側のラブラドルからなる、四十万四千五百平方キロの地域だ。アメリカのアラスカやテキサスより大きく、日本全体の二倍もある。しかし、「ザ・ロック」という異名があるように、大半が岩だらけのため、人間の居住には不向きで、五十八万人ほどしか住んでいない。

ただ、あとで述べるように、鉱物、水力、林産などの資源はきわめて豊富で、近年発見された海底油田とともに、同州の大きな魅力となっている。

ニューファンドランド州は、いろいろな意味で、カナダの他の州とは一風変わっている。そのひとつは、世界における英国最初の植民地であったこと。レイフ・エリクソンなどの「北方人」（バイキング）が、西暦一〇〇〇年頃、島の北端に立ち寄った形跡もあるが、イングリッド南西部の貿易港プリストルを出航したジョン・カボットが、一四九七年に現在のセント・ジョーンズに達したのが、史実に残っているヨーロッパ人のニューファンドランド「発見」である。

この「ニュー・ファウンド・ランド」（新しく発見された土地）は、その後、長

首相 ブライアン・ベックフォード（進歩保守党）
首都 セント・ジョーンズ
面積 四〇四、五一七平方キロ
人口 五七八、九〇〇人（八四年）
州民所得 五十億ドル（八四年推定）

い間、プリストルの商人と彼らに雇われた漁夫以外、ヨーロッパで知る者はなかった。ニューファンドランド沖は世界的な漁場で、商人たちは漁夫が持ち帰るタラなどにより巨大な富を築いたが、莫大な課税を恐れて、すべてを秘密にしていたのである。しかし、一五八三年、サー・ハンフリー・ギルバートが、女王エリザベス一世の名においてニューファンドランドの英国領有を宣言、英国最初の植民地となった。

第二は、ニューファンドランドが、一八六七年のカナダ連邦結成に加わらなかったことである。ニューファンドランドは、一八五五年、英連邦自治領の地位を獲得する。独自の通貨やパスポート、切手を発行し、独自の国歌を歌い、独自の関税を課す、ほぼ独立国なみの存在であった。一八六五年、英領北アメリカ植民地の連邦結成問題が起こったとき、ニューファンドランドは積極的に交渉に参加したが、六九年の選挙で連邦加盟は否決されてしまった。

ようやく加盟が実現するのは、一九四九年のことである。住民投票で、責任政府、英国統治、カナダ連邦加盟の三つの選択のうち、連邦加盟が僅差で勝利を取

ニューファンドランド州



めた結果であった。その後、社会保障政策など、連邦加盟のメリットを説いたスモールウッド自由党政権が二十年にわたって続いたのを見ると、加盟は州民から完全に受け入れられたのだから。

州の経済は、地下資源が中心になっている。ニューファンドランド島は昔から銅、亜鉛、銀、金、カドミウム、鉄鉱石、ほたる石、葉ろう

石、アスベスト、シリカ、石こう、石灰石などの産地として知られてきたが、いまではこれらの鉱物も、カナダ全体の生産量の半分以上を占めるラブラドル地溝の高品位の鉄鉱石のために影がうすれてしまった。

最近特に脚光を浴びているのは、ニューファンドランド島とラブラドルの南東近海で進んでいる海底油田の開発。九十三万二千平方キロに及ぶ大陸棚では、一九六〇年代から地層調査が始まり、アモコ、インペリアル、バナムなどの各社が競って探査に乗りだした。

しかし若干期待を抱かせる油徴は見せたものの、いずれも商業開発できるほどの規模ではなかった。

一九七九年、グラント・バンクス北方のアバロン海盆で何本かの油井を試掘したところ、日量一万一千四百バレルの上質な原油が噴出した。商業生産の可能性をもつことが

分かった北米大西洋岸最初の油田である。同年、同じグラント・バンクスで発見されたハイバーニア鉱区では、開発可能な石油が十八億五千万バレル、天然ガスが二兆立方フィート埋蔵されていることが確認されている。世界でも最大規模で、北海でもそれより大きい油田は二つしかない。油田の開発は、一九九〇年代に本格化するものと思われる。

ニューファンドランド州は、水力資源にも恵まれている。そのため、エネルギー



定置網でマダラをひきあげる漁夫。

鉱物資源と水力の宝庫

ケベック州の北東に三角形に広がるラブラドル地方は、鉱物資源と水力資源の宝庫だ。

鉱物資源の筆頭は鉄鉱石。ニューファンドランド州はカナダ全体の鉄鉱石の半分を生産しているが、その大半はアイアン・オー・カンパニー・オブ・カナダが経営する二つの鉱山とラブラドル西部のワブッシュ山で採掘されたものだ。日本にも五千万ドル相当（昨年）の鉄鉱石が輸出されている。

その他の鉱物資源には、アスベスト（石棉）、シリカ、葉ろう石、リン酸塩、重晶石、石こう、石灰石、セメントなどの建築資材、ほたる石、卑金属などがあり、そのうち、クリスタル（温石綿）、アスベストやリン酸塩などは日本にも出荷されている。

その他、イットリウム、ジルコニウム、希土酸化物などの特殊鉱物やウラン、マグネシウムも発見されており、今後さらに多種多量の金属・非金属鉱物が発見される可能性も持っている。こうした鉱物資源に加えて豊富な水力資源。特にチャーチル・フォールズの水力発電所で生産される電力はケベック電力公社がそのほとんどを買い取り、ケベック州内で消費するほか、米国に輸出している。

―集約的な紙・パルプ産業が盛んだ。

ニューファンドランドでは、六〇年代七〇年代を通じて数多くの水力発電開発計画が実施されてきたが、特に一九七四年に完成したチャーチル川（ラブラドル中部）の電源開発プロジェクトは、当時としてはカナダ史上最大のもので、しかも民間ベースで行われる世界最大の建設工事であった。ここで生産された電力の大半は、ケベック電力公社（ハイドロ・ケベック）を通じて、ケベック州や米国に供給されている。

ラブラドルには、ローワー・チャーチル川のガル・アイランド急流やマスカラト瀑布など、未開発の電源も多い。そこで開発される予定の電力の一部は、いずれベル・アイル海峡の海底に掘られるトンネルを通じて、ニューファンドランド島に輸送されることになる。

地下資源や水力資源の重要性もさることながら、州経済の基盤は昔も今も漁業である。一九七七年にカナダ政府が経済専管水域を二百マイルに拡大したことに伴い、漁業の重要性はさらに高まった。ニューファンドランド近海では魚が増えつつあり、食糧供給、雇用、収入などの面から大きな期待が寄せられている。

可耕地が少ないため、農業生産は限られている。専業の農家はたった四百戸しかない。しかし、一九五〇年代以来、牛乳はほぼ自給自足しているし、養豚と養鶏はニューファンドランド島のアバロン半島全域で盛んだ。

林産業は、州経済に大きな位置を占め

る。ニューファンドランド島の大半とラブラドルの南部および中部は、黒えぞまつとバルサムモミ、かば、からまつ、バルサムポプラなどが生い茂っており、生産林は三万ヘクタールにおよぶ。

およそ五十七万八千の州住民のうち、ほとんどはイギリス南西部とアイルランド南部から一八世紀後半から一九世紀初めにかけて渡ってきた人々の子孫だ。人々は、いまでも、シェークスピアやチャールズ時代の言葉の混じったニューファンドランド独特の方言を話す。ニューファンドランド英語の辞書が出版されているほどである。

かつて、「島」の芸術家はカナダ本土へ移住することが多かったが、最近はその州内にとどまって活動する人が増えた。そのため、芸術活動はきわめて盛んだ。

ニューファンドランドは地理的にカナダ本土から離れているため、昔の英国や西ヨーロッパの伝統が根強く残っている。これも、この州の大きな特徴だ。ヨーロッパ人が築いた北米最古の町として知られる州都セント・ジョーンズは、幾度かの火災で焼失して一八〇〇年以前の建物などはほとんどないが、それでも岸辺から見ると、アングリカン・カテドラルやカトリック修道院、コロニアル・ビルディング、ニューファンドランド・ホテル、裁判所などの建物や街路などに、昔の英国やヨーロッパの色を濃く残している。人口わずか八万三千人だが、埠頭にはいろいろな国の漁船が旗をなびかせ、国際色を醸し出している。

ニューファンドランドにおける人口分布を決定したのは漁業であった。この分布は現在もあまり変わっていない。昔からの漁業基地であるアバロン半島とニューファンドランド北東部は、現在でも人口が集中しているところだ。（アバロン半島のランス・オー・メドーズは、十世紀末から十一世紀にかけてバイキングが訪れ、北米最古のヨーロッパ建築跡地と

プリンス・エドワード・アイランド州

『赤毛のアン』と

ポテトの島

して知られる。）
州都セント・ジョーンズ以外の「大きな町」には、アーセンシア（第二次大戦時に米国の海軍基地があった）、ブラセンシア、グラントフォールズ、ウインザー、ボナピスタ、コーナーブルックなどがあるが、ニューファンドランドの特徴は、湾や入江、アウトポートと呼ばれる何百もの小漁村が多いことだ。

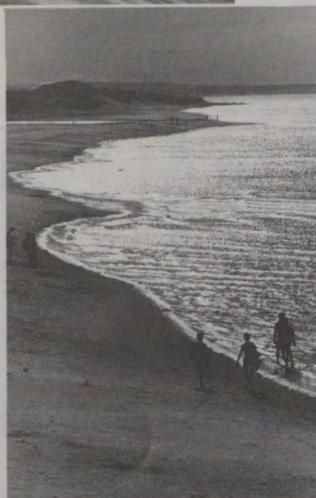
首相 ジェームズ・リー（進歩保守党）
首都 シャーロットタウン
面積 五、六五七平方キロ
人口 一二五、〇〇〇人（八四年）
州民所得 十一億ドル（八四年推定）
長さ二百二十四キロ、幅は二・五キロ

『赤毛のアン』で知られるプリンス・エドワード・アイランドは、セント・ローレンス湾に浮かぶ面積五千七百平方キロ（淡路島の約十倍）の美しい島である。原住民のミクマック族インディアンはこの島を「波に抱かれた故郷」と呼んだ。伝説によると、神様は世界中の美しいところを描いたあと、いろいろな絵の具をかき混ぜたのに筆をひたし、この島を創造したという。一五四三年に島を発見した探検家ジャック・カルチエは、「目にすることのできる最も美しい島」と形容したといわれる。およそ二百年後、ピクトリア女王の父ケント公の名前にちなんでプリンス・エドワード・アイランドと名づけられた。観光案内のパンフレットは「湾に浮かぶ庭園」と称している。

一八六四年にはシャーロットタウンで建国会議が開かれ、六七年、カナダ連邦が結成される。しかし、PEIがカナダ連邦の仲間入りをするのは、六年後の一八七三年のことである。初代の連邦政府首相ジョン・A・マクドナルドの、大陸横断鉄道の敷設と対米保護関税の設置を柱とする「ナショナル・ポリシー」が、PEIの利益を害する、というのが連邦加入を遅らせた主な理由であった。当時も、現在と同じく、PEIの貿易はカナダの

プリンス・エドワード・アイランド州

プリンス・エドワード・アイランドの村。



キャベンティツシュ・ビーチ

ポテトに次いで大きいのは、酪農製品。穀物は自給自足態勢にあり、またかぶやカリフラワー、ブロッコリを中心とする

他州ではなく、米国が主な相手であったが、「ナショナル・ポリシー」ゆえに州の経済が停滞した、と考える人はいまもいる。確かにPEIは経済的にカナダ全体から取り残されたが、それは「ナショナル・ポリシー」のせいというよりは、技術革新や市場からの距離などによるところが大きいだろう。いずれにしても、経済的な苦境の中で、若い男女は島を離れ、残った人々も貧しい生活を強いられた。状況は戦後、若干良くなったものの、それでも一九六六年には連邦政府が島全体を後進地域に指定している。

島の最大の収入源は農業。土地はもともとよく肥えているが、川や湾で簡単にとれる海藻や貝、かきなどが土壌をさらに肥やしてくれる。主な作物はポテトだ。PEIは、長い間、米国やヨーロッパ、中東、あるいは南米向け種ポテトの重要な供給地となっている。一九八四年には、二万八千ヘクタールにわたってポテトが栽培された。価格にして、推定一億ドルである。

州政府は、シャーロットタウンやサマースайдに工業区域を設け、また中小企業向けに優遇策を導入するなど、製造工業にも力を入れている。ファッション衣料、電子機器などが、州の工業製品とし

野菜もたくさん生産されている。(日本は、毎年、数百万ドルにのぼる冷凍野菜をPEIから輸入している)。換金作物としては、ほかに、タバコなどがある。

漁業は、十八世紀に盛んになった。最大の水産資源はロプスターで、一九〇〇年には州の全漁獲高の半分を占めるほどだった。ロプスターは現在でも漁業の中心だが、ロプスターの閑漁期にはタラ、赤うお、ヘイク(タラの一種)、フラウンダー(ヒラメ科の魚)などの底魚、サバ、ニシンなどの回遊魚、あるいは帆立貝を捕獲する。ブルーフィン・トウナ(本マグロ)をねらう漁師もいる。本マグロは、ほとんどが日本に輸出されている。

いま期待が寄せられているのは、カキの養殖。カキの卵は州政府のふ卵場でかえし、養殖場へ送られる。帆立貝やムラサキガイ、ハマグリ、マス、海藻やハズツノマタ(これから抽出したカラジールハンは、食品の乳化剤または飲料の清澄剤として用いる)などの養殖も可能になった。

第二次産業は、農産物や水産物の加工が中心になっている。ただ最近では、クロスカントリー用のスキー、グラスファイバー製ボート、印刷、金属加工、高級食器、乳製品といった、軽工業も盛んになりつつある。

州政府は、シャーロットタウンやサマースайдに工業区域を設け、また中小企業向けに優遇策を導入するなど、製造工業にも力を入れている。ファッション衣料、電子機器などが、州の工業製品とし

世界的なポテトの産地

プリンス・エドワード・アイランドは、日本では「赤毛のアン」で有名だが、世界的なポテトの産地でもある。

カナダは、オランダに次ぐ世界第二の種ポテトの輸出国。その六ないし七割はこの小さな島で栽培されたものだ。ポテト畑は七万二千エーカー、年間産出高は七十万トン(価格にして約七千万ないし一億ドル)。人口わずか十二万余の島の最大の収入源である。ポテト産業は、袋作りから輸出取引にいたるまで、州経済を支える柱となっている。

南米アンデス生まれのポテトが、プリンス・エドワード・アイランドで栽培されたのは、十八世紀のことである。フランスでは一七六〇年代にポテトが普及しており、当時フランス植民地イール・サン・ジャンとして知られていたこの島にも、そのころフランスからもたらされたのだろう。今では、島中、ポテト畑だ。

十九世紀に入ると、隣りのノバ・スコシアやニュー・ブランズウィックにも種ポテトを輸出するようになり、一八三〇年代にはポテトが島の主要輸出品になっている。

マーケットは、カナダ国内や米国をはじめ、世界各地にまたがっている。日本にも昨年、売り込みのためのミッシェルがやってきた。

『赤毛のアン』の『緑色の切妻屋根の家』。



てあげられる。

プリンス・エドワード・アイランドは、セント・ローレンス湾の海流のために寒さが緩和されている上に、白い砂浜や、起伏した緑の農地、そしてロブスター料理……と、観光資源に富み、カナダの他の地域やアメリカ合衆国から、フェリーや飛行機で年間六十万人をこえる観光客が訪れる。観光業は年商一億ドルの一大産業だ。プリンス・エドワード・アイランド国立公園は、国内で一番小さな国立公園だが、人気は二番目に高い。

PEIの『輸出品』の中で最も有名なものは、ルーシー・モンゴメリーの『赤毛のアン』(原題は、『緑色の切妻屋根の家』)をはじめとする一連の作品だ。作品はいまでも世界中で読まれており、その中に出てくるなつかしい土地を訪ねて、毎年何千という『アン・ファン』がやってくる。もちろん、キャベンディッシュにある『緑色の切妻屋根の家』は欠かせない観光名所だ。

一九六五年以来、シャーロットタウンでは『赤毛のアン』のミュージカルが毎夏開催されているが、これも原作に劣らず大人気を博している。場所は、シャーロットタウン建国会議の百周年を記念するために、各州が拠出した寄付金で建設された芸術センターである。

ニュー・ブランズウィック州

英語とフランス語が公用語

が公用語

ニュー・ブランズウィック州は、ケベック州に次いでフランス系住民の割合が高く(三五パーセント)、ケベック州と並んで英語とフランス語が共通語となっている(英仏両語が公用語として定められているのは、連邦政府とニュー・ブランズウィック州だけ)。

その理由は、ニュー・ブランズウィックが、かつてアカディアと呼ばれていたフランス植民地の一部だったからである。アカディア(アカディ)とは、『豊饒な土地』という意味である。この植民地は一六〇四年に設立されたが、一七一三年に英国に割譲され、フランス系住民(アカディアン)の多くは追放されて米ルイジアナ州に移った(ルイジアナ州では、アカディアからやってきた人々を『ケイジャン』と呼ぶ。『アカディアン』が変形した言葉である)。アカディアンの一部は奥地に逃げ込んでひっそりと住んだ。事態が落ち着いたらと、ルイジアナから戻ってきた人々も多かった。しかし同じフランス系といっても、アカディア人はケベック人とはいろいろな点で異なる。フランスの出身地も違えば、渡来の時期も、なまりも、伝統的な職業も違う(ケベックの人々は豊かなセント

首相 リチャード・ハットフィールド(進歩保守党)
首都 フレデリクトン
面積 七三、四三六平方キロ
人口 七二二、三〇〇人(八四年)
州民所得 七十二億ドル(八四年推定)

・ローレンス川岸を耕す農民であったが、アカディア人は漁夫が多かった。同じくカトリック教徒ながら、主な祭日も、ケベックでは聖霊者ヨハネの祭日(六月二十四日)、アカディアでは聖母マリアの被昇天祭(八月十五日)だ。
その後、米国の独立戦争の結果、親英国派の人々およそ五千人が当時ノバ・スコシアといわれていた一帯に渡ってきた。二つの植民地に分割され、一七八四年、今日のニュー・ブランズウィック州の前身であるニュー・ブランズウィック植民地が誕生する。
こうして、フランス系のアカディア人と、米国から渡ってきた英国系住民が共存する、現在の二言語社会へと発展したのである。
ニュー・ブランズウィック州の人口はおよそ七二万人。その四五パーセントは、セント・ジョン(四万五千人)など、八つの都市に住んでいる。
州の経済基盤は、林業、鉱業、漁業、ポテト栽培を中心とする農業、それに観光だ。
ニュー・ブランズウィック州は、世界でも有数の森林地帯で、面積のほぼ八五パーセントはトウヒ、バルサムモミ、マツ

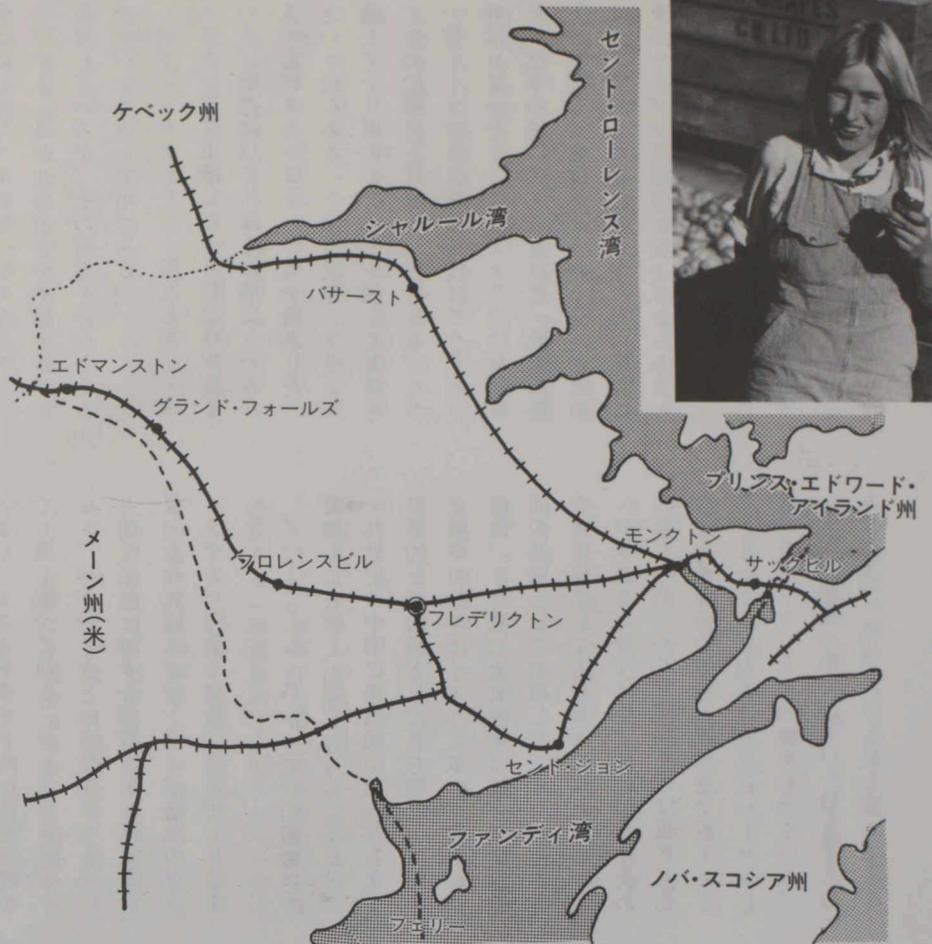
日本向けに魚介類

カニ、ニシン、タラ、カレイ、シシヤモ、マグロ、エビ……世界三大漁場のひとつグランド・バンクスを控えた大西洋沿岸は、魚介類の宝庫である。
日本にも、ズワイガニ、ニシン(およびカズノコ)、シシヤモなどを大量に輸出しているが、特にニューファンドランド沖を中心に漁獲されるシシヤモの対日供給はカナダがノルウエーを抜いて第一位、ズワイガニはアラスカに次いで第二位だ。

そのほか、量は比較的少ないが、日本は甘エビ、ヒラメ、オヒョウ、それにカラスガレイなどの底魚も入荷しているし、一頭三百キロから四百キロもある本マグロも空輸されている。日本のレストランでお目にかかるアメリカン・スタイルのロブスターも、ほとんどがカナダ大西洋産である。

今後期待されているのは、ウニやツブガイ、それにマダラである。マダラは、日本人の口にもよく合う。
すでに外食チェーンがわずかながら利用しており、これから次第に入荷が増えるものと思われる。また大西洋沿岸は、セント・ローレンス川河口一帯を中心に、世界最後のウニの宝庫といわれており、そのウニが日本でシタネに使われる日も、そう遠くないだろう。

ニュー・ブランズウィック州



などの針葉樹を中心とする森林におおわれている。商業林は千六百万エーカーもあり、紙パルプ産業の原料を提供している。紙パルプの年間出荷高は、九億ドルをこえる。

鉱業が本格的になったのは、一九五〇年代にニュー・ブランズウィック大学の学生がバサースト地域の硫黄鉱を分析したところ、鉄と硫黄のほか相当量の亜鉛、鉛、銅、銀などを発見したのがきっかけであった。

同州は、現在、アンチモンとビスマス

でカナダ最大、亜鉛で第三位、鉛と銀で第四位、銅で第六位の生産地である。一九八三年の鉱業生産は五億一千七百万ドル。一九九〇年までには、十億ドルに達するものと予測されている。

農業の中心はポテト栽培。ポテトは、州の農民にとって、最大の換金作物であり、生産総額は年間一億五千万ドルにのぼる。フロレンスビルにあるマケイン・フーズ社は、世界最大の冷凍ポテト製品メーカーとして知られる。ポテトのほか、酪農や畜産、穀物、果実、野菜などの栽

培も盛んだ。

漁業は大西洋沿岸四州のなかでは最も生産量が低い。魚種は五十種類をこえ、その多くが米国、ヨーロッパ、日本などに輸出されている。

電力資源も豊富で、水力、火力、原子力などによって生産された電力の余剰分は、他の州や米国に送られている。

資源産業が、今後ともしばらくは州経済の柱となることは間違いないだろう。しかしながら、金属加工、機械、プラスチック加工、電気製品、食品加工などの製造工業部門の拡大が目覚ましく（総出荷額は年間三十億ドルをこえる）、経済基盤は急速に変わりつつある。大西洋沿岸で石油や天然ガスの開発が進むにつれ、かつて世界で最も多くの商船を造っていたセント・ジョンの造船所では、掘削船などの製造に忙しい。



セント・ジョンのマーケット。

芸術活動は、文学と音楽を中心に、長い歴史をもっている。「文学があふれている」といわれるほど、ニュー・ブランズウィックは作家や出版社が多いが、地域の慣習や気風を扱ったものが多いせいも、人気はほとんどの場合州内にとどまっている。ただし、五年前にフランスのゴンクール賞に輝いた女流作家アントニーヌ・マイエウイリアム・フォークナーの作風に似ているといわれるデビッド・アダムズ・リチャーズの作品は、全国的に読まれている。また州都フレデリクトンは、プリンス・カーメンやチャールズ・G・D・ロバーツなどを中心にカナダ最初の文芸運動が起こったところで、いまでも「詩人の巣」として知られる。ニュー・ブランズウィック大学が発行している『ザ・フィドルヘッド』は、カナダ最古の文芸雑誌だ。

音楽や演劇の分野でも、英国およびフランスの伝統をいかした活動が州内外から高い評価を受けている。歌手のエディ・ス・バトラーやローズマリー・ランドリはアカディア出身だし、州の合唱団はいろいろな国の音楽祭に参加している。

ニュー・ブランズウィックが北アメリカでユニークなのは、工芸技術だ。機械時代が到来する前に人々の生活が確立されていたのと、十九世紀には比較的孤立していたこともあって、住民はさまざまな道具を自らの手で作らなければならなかった。その伝統もあってか、織物を中心に、装飾品、手作り家具、陶芸品などに見るべきものが多い。

ノバ・スコシア州

カナダ一の

水産物輸出

セント・ローレンス湾の南に、エビのような形でのびているのがノバ・スコシア州である。カナダ大陸とは、「エビ」の背中の部分にあたる細いチグネクト地峡でくっつけているだけだ。その頭の部分には、カンソ海峡をへだてて、ケーブ・ブレトン島が北海道とやや同じ格好で位置しているが、その両方を合わせたのがノバ・スコシア州である。

ジョン・カボットが一四九七年、ノバ・スコシアに上陸したことが記録されている。実際にはそのはるか前に、バスク人や古代スカンジナビア人が渡来した、という説もある。一六〇三年、フランス国王アンリ四世がデュモン卿に毛皮貿易のために植民を許可したときから、この一帯——フランス統治時代はアカディと呼ばれていた——は北アメリカにおける英仏抗争の渦に巻き込まれて、変転の歴史をたどる。地位がようやく定まったのは、フランス敗退の結果、一七六三年に東部カナダが英国領となってからのことである。

今日のノバ・スコシアの基礎をつくったのは、米国の独立戦争のとき何万とやってきた親英派の人々（「国王派」と、一八〇〇年にスコットランドからケーブ

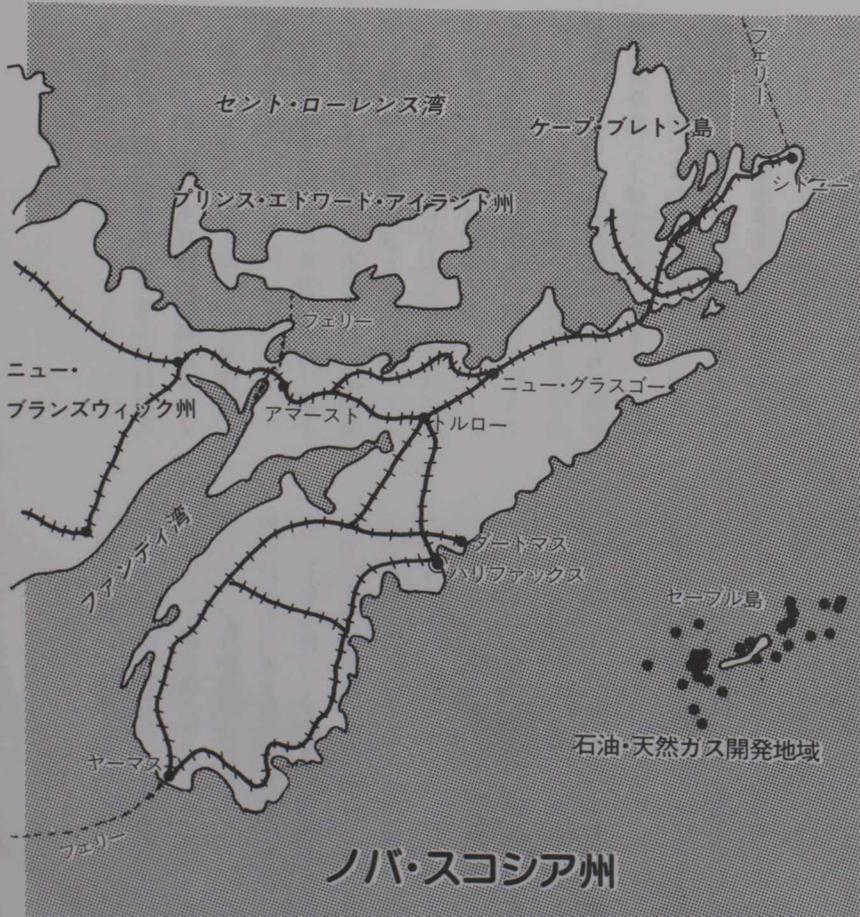
首相 ジョン・ブキヤナン（進歩保守党）
首都 ハリファックス
面積 五五、五〇〇平方キロ
人口 八六八、一〇〇人（八四年）
州民所得 九十二億ドル（八四年推定）

・ブレトンなどに移住した人々。ノバ・スコシア（ラテン語で「ニュー・スコットランド」のこと）は、そもそも一六二一年、あるスコットランド人の提案で名付けられ、ウィリアム・アレクサンダー卿に下賜されたものであるが、スコットランドから多数の移住者が到来したことにより、スコットランド的な色彩が現在でも濃く残っている。ゲリック語やキルト、バグパイプといったスコットランド的な伝統に対する郷愁はきわめて強く、夏ともなればスコットランド高地のフォークダンス大会や集会、コンサートで賑わう。

ノバ・スコシアは、かつて、船舶輸送の要地として栄え、州都ハリファックスは、十九世紀の中頃に蒸気船が現われるまで世界的な造船所として名を馳せ、米国独立戦争のときはイギリス軍の主要軍需供給地、また第二次大戦中は連合軍輸送船団の基地として活躍した。また、キルトの生産地としても世界中に知られていた。いずれも、今では重要性はかなり失われたものの、ハリファックスは現在も北米でも最大級の不凍・深水港であること変わりなく、また人口の三五パーセントはスコットランドとの縁をもっている。大西洋四州の中では人口が最も多く（約九十万人）、経済的にも最も豊かである

（ただし、他の三州と同じく、連邦政府の平衡交付金への依存率はかなり高い）。その主な理由は、漁業や林業などの伝統的な産業が好成績をあげているのと同時に、近海での石油・天然ガス開発が活発になったことが大きい。

カボットは、ノバ・スコシア沿海について、「魚類で埋め尽されているが、それは網でとるような程度ではなく、バケツですくいあげることができるほど豊富である」と、航海記に書いているが、漁業がいまでも州経済の屋台骨であることに変わりない。カナダは世界最大の水産物輸出国で、八三年には十六億ドル相当を輸



五稜郭からハリファックス港を臨む。

出した。その四割を占めているのが、ノバ・スコシア州である。専業あるいは副業として漁業に従事しているのは約一万一千人。水産物加工業など、陸上勤務の人を含めると、二万人に達する。一九七七年に二百カイリ専管水域が設定されたことにより、州の漁業は大きな恩恵を受けた。また、昨年十月、ハーグ国際司法裁判所が、メーン湾における米加間の境界問題を解決したことも、ノバ・スコシアなど大西洋沿岸諸州にとって、きわめて重要な意味をもっている。カナダ側の領海とされたジョージズ・バンク北西一帯は、魚が豊富で、しかも石油・天然ガスが発見される可能性も大きいからである。

近海でとれる主な魚種は、ロプスターと帆立貝（両方で、年間漁獲高の四割を占める）、あとタラ、ハドック、ニシンなど。最近では、イカなどの漁獲量も増えつつある。

いまノバ・スコシアで最も注目を浴びているのは、ハリファックスから二百五十キロ東に広がるスコシアン・シェルフ（大陸棚）での石油と天然ガスの探査・開発。特に、一九七九年にモービル石油（カナダ）が天然ガスを発見してから、本格的な商業生産への期待が高まってきた。それとともに、ハリファックスからタートマスにかけて、建築ブームが起きている。

伝統的な産業である林業と農業も忘れてはならない。森林は四百万エーカーに及び、林業に従事している人は五千人をこえる。林産業は、パルプ、製紙が中心

だ。農地面積はおよそ四十万ヘクタール。酪農が主で、養鶏と種々雑多な作物がそれに続く。

果実栽培も盛んで、かつてはリンゴが州第一の換金作物であったが、現在ではブルーベリーがそれにかわった。ブルーベリーの生産量は、過去十年間に倍増した。その最大の理由は、対日輸出の増大。昨年はおよそ一万トンのノバ・スコシア産ブルーベリーが日本向けに輸出されている。日本はまた、ノバ・スコシアで産するピートモス（泥炭ゴケ）の一大市場でもある。

鉱業で大きいのは石炭。ケーブ・プレトンには、世界でも最大の部類に入る炭田がある（埋蔵量約三十億トン）。一時は、不況をかこっていた石炭採掘であるが、その後の石油の価格上昇や供給の不安定に助けられて、近年は活況をとり戻している。州の電力は、八割が火力に頼っており、石炭は主要なエネルギー源となっている。

また世界でも最も潮の干満差が大きい（十三メートル）ファンデイ湾では、潮力発電の実験も行われている。昨年暮れには、二十メガワットのパイロット・プラントが発電を開始した。

ノバ・スコシア最大の雇用者は、ケーブ・プレトンにある州営のシドニー・ステイル工場と、数多い水産加工工場、それにミシュラン・タイヤ社の三工場だ。特にフランス系多国籍企業のミシュラン・タイヤは、従業員が五千人近くもあり、製造業部門における大西洋地域最大

の雇用者となっている。科学研究も盛んで、とりわけ海洋研究の分野では、タートマスにベッドフォード

石油と天然ガス

ニューファンドランド島やノバ・スコシア州の沖合で、魚に変わる新しい資源が国際資本の注目を浴びている。石油と天然ガスである。

一九五九年にモービル石油がノバ・スコシア沖のセーブル島一帯で磁気探査を実施して以来、近海ではさまざまな石油企業が調査を繰り返してきた。そして、一九七一年には、モービル石油がセーブル島の近くで、日量千五百万立法フィートの天然ガスと日量二千九百バレルの石油を発見する。一九七九年には、モービル石油が日量二千二百六十万立法フィートの天然ガス層を掘り当て（ノバ・スコシア沖のベントウーラD―二三号井）、同じ年、ニューファンドランド島の東で十八億五千万バレルの石油が採掘可能というハイパーニア油田を発見した。

これまでの発見から、ニューファンドランド島沿岸の大陸棚（グランド・バンクス）に埋蔵されている石油は八十億バレル、ノバ・スコシア州南東のスコシア・シェルフの石油は四億バレル、天然ガスは千七百九十兆立方フィ

ド海洋研究所、ハリファックスにダルハウジー大学と国際海洋開発センターを擁し、世界的に知られている。

ート（約五千億立方メートル）にのほるものと推定されている。

ニューファンドランド海域の石油・天然ガスについては、その所属は連邦政府に帰す、との最高裁判所の判決がおりていたものの、管理・運営は連邦・州間の争点になっていた。このほどのような合意が成立したが、それによると、沿海の石油および天然ガスの探査・開発に当たる機関として連邦・ニューファンドランド州沿海石油審議会を設け、連邦政府と州が共同で資源開発にあたることになっている。

合意の主な内容は次の通り。
一、生産システムを含め、沿海油田の開発方法は州政府が決定する。ただし、その方法では自給自足の達成が不当に遅れると判断されれば、連邦政府の決定がそれに優先する。

一、ロイヤルティ（鉱区使用料）、法人税、売上税などは、州が徴収する。州に対する平衡交付金は、石油や天然ガスの生産が開始されてから徐々に縮小する。

一、州が資源開発に必要な基盤整備ができるように、連邦政府七・五、州政府二・五の割合で、三億ドルの開発資金を設ける。

カナダで国立公園が誕生して、今年でちょうど百年。第一号のバンフに始まって、現在二十九の国立公園がある。その三十一のなかでカナディアン・ロッキーの四つの国立公園が、昨年、国連のユネスコから、世界的名所旧跡に与えられる「ワールド・ヘリテッジ地域」に指定された。

「世界の遺産」に指定



ヨーホー国立公園

カナディアン・ロッキーは、年間九百万人が訪れるカナダ第一の自然観光地域。今回のワールド・ヘリテッジ指定地域となったバンフ、ジャスパー、ヨーホー、クートネーを中心として、全部で七つの国立公園がある。

カルガリー（アルバータ州）からカナダ横断道路を西に走って百三十キロの所にあるバンフ国立公園は、観光客をはじ

め、スキーヤー、ゴルフアー、釣り人たちの憧れの的。標高二千五百メートルの山にゴンドラで登ると、ひすい色の湖や銀色の氷河、温泉を懐に抱いて、山々が縹渺と広がっている。キャンピングカーの繋泊地やテント施設も完備し、家族の休暇によく利用される。

ジャスパー国立公園は、その昔、この辺りで毛皮交易所を営んだ毛皮商人ジャスパー・ホーウィズにちなんで命名された公園で、一帯には毛皮貿易とインディアンの活躍のエピソードがたくさんある。

世界で最も美しいドライブウェイといわれる氷河パークウェイと氷河は、ジャスパーとバンフの両国立公園にまたがっている。

ジャスパーは北米全体で最大規模の自然公園である。自然散策や山歩きのメッカとして愛され、そうした山道は合計一千キロに及んでいる。

ヨーホー国立公園は、ロッキー山脈のど真中にある。神々しい高峰、氷河湖、奥深い原始林、壮大な滝、夏になると花の咲き乱れる谷間——ヨーホーは山の神秘をたたえた公園である。

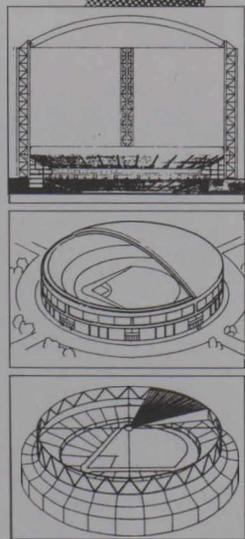
クートネー国立公園は、四つの公園のなかで一番南寄りにあり、気候も比較的穏やか。インディアンにはるか昔から利用されてきたラジウム温泉が、この公園の目玉の一つ。冬でも人気を呼んでいる。冬のクートネーは、かんじきをはいて山を歩くスノーシューイングが盛んである。

トロントのど真中に、巨大な多目的スポーツ・スタジアムが建設される。屋根に世界最大の開閉式ドームを採用。晴天時には明かるい陽光の下で、雨天や雪には閉じた屋根の下で競技が楽しめるようにした全天候競技場だ。

収容人員は野球で五万一千五百五千、フットボールなら六万人。競技場の直径二百七メートル。屋根の高さ六十メートル。敷地全体は四・五ヘクタールある。

完成時には、カナダの人気球団トロント・ブルージェイズと、フットボール・チームのトロント・アーゴノーツのホ

屋根は開閉式ドーム トロントに 六万人収容の 全天候競技場



ドーム屋根の設計案。上から順にエア・トラス方式、半回転方式、ファン方式。

ームグラウンドになる。またスポーツ競技だけでなく、大規模なトレード・ショールやコンサート、各種大会の会場にも使用できる。スタジアム全体の設計は、トロントの建築会社クラング・アンド・ボーク社が担当するが、問題の開閉屋根にどの方式の設計を採用するかはまだ未定。

有力視されているいくつかの設計案は、すべて最大限の採光と、ドームの迅速な開閉に工夫をこらしている。そのうち三つを紹介すると、まずクラング・アンド・ボーク社がフランスの著名な飛行船メーカーであるエアズール・エファ社な

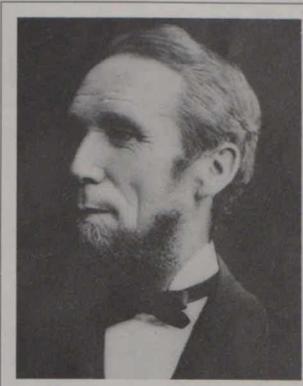
どと共同設計したのは、エア・トラス方式。いわば空気膜の屋根である。チューブの先から圧縮空気を吹き出して、空気膜を作る方式だ。

オンタリオ州ミシソガのDAF・インダルの設計案は、アルミ枠に繊維膜を張ったドーム屋根で、その半分が回転してあとの半分と重なり、開閉する。

また、ゲイジャー社のファン・ルーフは数片からなる円屋根が、扇子のように開閉する方式をとっている。

屋根付きスタジアムは、さほど珍しくなくなってきたが、巨大な屋根でかつ開閉式となると技術的にも一段と困難が増す。しかも現地の気候条件にマッチし、現実的にかつ美的要素も備えていなければならない。専門委員会ではこうした点を考慮した上で、どの方式を選ぶか、一年以内に結論を出すという。

総工費約一億五千万（約二百七十億円）とされるこのプロジェクトは、アラスカ・オンタリオ州およびトロント市などの出資で、今秋に着工、三年後の一九八八年に完成の予定。屋根の取り付けは、八七年初めになるものと見られている。



“カナダの政界は 墮落している”

ヨーク大学教授 ジョン・セイウェル

カナダの二代目首相アレクサンダー・マッケンジー。もし彼の名前がもう少し違っていたら、国民の記憶にもっと強く刻まれていたかもしれない。カナダ史にはアレクサンダーやマッケンジーがわんさといふ。カナダを初めて横断した探検家も同姓同名のアレクサンダー・マッケンジー。トロントの初代市長で反乱を起こしたのは、ウィリアム・ライアン・マッケンジー。そしてマッケンジー・キングといえは十七年間も首相の座にあって、数々の偉業を成し遂げた自由党の大立物だ。しかし、鉄道汚職事件の政治的混乱と経済不況の時代を引き受けたアレクサンダー・マッケンジーは、本来ならもっと評価されていい存在である。

石屋から政治家へ

マッケンジーは一八二二年、スコットランドの貧しい家に生まれた。十代で石屋に奉公に出たが、二十歳のとき恋人と一緒にカナダへ渡り、キングストンとサニアで建築業を営んで成功した。そのかわらで自由党系の新聞「ランプトン・リフォーマー」を発行している。

後年、首相になってから、彼はやっぱり石屋だ”といわれたように、政治家としての鋭敏さ、華やかさには縁がなかった。文を書けば誤字だらけ、文法はしょつちゅう間違い、演説は単調で事務的、お世辞にも魅力的といえなかった。たまたき上げた男の常として、彼は真面目に努力すれば必ず成功すると信じ、したがって落後者や不運な人には同情心を持たな

かった。しかし権勢や名誉にも、関心が薄かった。三度ほどナイト爵位の申し入れがあつたが、彼は三度とも辞退している。

頑固で、非妥協的。知性や教養というものをはほとんど信用しなかった。政治家のなかには、あまりにも明敏すぎて成功しない人がある。例えば自由党のもう一人のリーダー、エドワード・ブレイクは、知的で有能、当然党首になって然るべき人物だったが、責任を自分で引き受けるよりは、評論家であることを好んだ。マッケンジーが政権をとった五年間、ブレイクはマッケンジー内閣を出たり入ったりした。

しかしマッケンジーは、華やかな才能には欠けていたとしても、勤勉さと努力では誰にも負けなかった。彼はよく、「今どきオタワに残っている大臣は、私くらいなもんだ」とこぼしながら、昼も夜も執務室で働き続けた。彼はまた、情実と腐敗のもとであった公共事業を国民の手に取り戻そうと、自ら公共事業大臣の役を買って出た。自分の金にもつましかったが、公金にも清廉で、「役得は当然」とする当時の風潮を苦々しく思っていた。押しかける陳情者から逃れるため、執務室に秘密の階段を取り付けさせたりした。

政治の浄化と公正化

「カナダの政界は墮落している。自由党の新風で浄化する必要がある」というのが、マッケンジーの信念であった。議員たちが企業や教会の圧力に屈しないよ

うに、議会に無記名投票制を導入し、選挙を全州同時実施にし、選挙費用の監視を厳しくして公正化を図った。

マッケンジーは、民主主義者であると同時に、ナショナリストでもあった。大陸横断鉄道建設の遅れをめぐって、カナダ総督(当時は英国人)が、ブリティッシュ・コロンビアの不満に同調して、マッケンジー政権の方針に介入しようとしたのに対して、彼は烈火の如く怒り、内政干渉だと抗議した。

マッケンジーは、自由党の理論派エドワード・ブレイクに支えられて、カナダの自治を少しでも進めようとした。そのひとつの施策が、カナダ最高裁判所の創設である。しかし最高裁をいったん創設してはみたものの、マクドナルドやイギリスに反対され、法的根拠の構築に失敗したことから、彼もこの件には固執しなかった。カナダの最高法廷は、一九四九年までロンドンの帝国枢密院司法委員会であった。

自由貿易と健全財政を固持

しかし無記名投票や最高裁、あるいは総督の権限などは、些末なことがらだったがとてよい。マッケンジーに課せられた真の課題は、新生カナダに経済的繁栄をもたらすということだったが、彼の頑固なまでの自由主義は、当の課題の実現に失敗したのだった。一八七三年に始まった世界的な不況は、カナダでも経済不振を招いたが、彼は古き良き時代の自由主義者として、自由貿易、均衡予算と

健全財政、そして安い税金をあくまでも信奉した。

首相になってまもなく、彼は自由党の大立物でトロントの「グローブ」紙社主ジョージ・ブラウンをワシントンに送り、米国市場の解放を要求して、互恵条約を更新しようとしたが、米上院はこれを拒絶した。彼は、歳入確保のために関税を若干引き上げはしたが、保守党が実業家や農民と組んで米国製品への高率関税を要求したときには、頑として耳を貸さなかった。関税とは、国民の五パーセントにしかすぎぬ人々を利用するために、九五パーセントの人に課税することだ、というのが彼の持論だったからである。

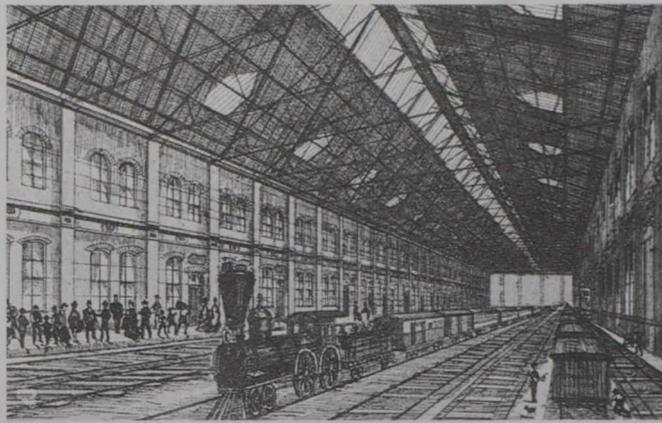
鉄道建設は慎重に

マッケンジーは、国の資力を超えてまでカナダ太平洋鉄道の建設を急ぐことはない、とも思っていた。民間企業の方でも、この不況時にあえて建設を強行しようとはしなかったから、彼は漸進主義をとおり、まずは五大湖の水路の間のいくつかの地域を鉄道で結ぶことにした。前首相のマクドナルドは、ロッキーを越える適当なルートが必ず見つかるかと信じて、

鉄道建設を推進したが、より慎重なたちのマッケンジーは、鉄道建設は人の定住と同じテンポで進めばよい、ロッキー越えのルートも、西海岸の終点候補地もいずればつきりするだろうという態度をとった。それは、人々の想像をかきたてる政策ではなかったが、少なくとも合理的で現実的な方法であった。エドワード・

ブレイクがいみじくも呼んだ。あの山々の大海原にたった一本の鉄道を通すために、オンタリオの税金負担が膨大になるのはかなわん——という感情があったことも事実だ。

一八七八年の総選挙に、五年間、野に下って精気いっぱいマクドナルドが、いわゆる「ナショナル・ポリシー」の大



1872年に改造・拡張されたトロントの中央駅ユニオン・ステーション。

最初から勝敗の決まった選挙戦であった。マクドナルドの強力なカリスマ性に對抗して、マッケンジーが武器としたのは、彼の真面目さ、政界浄化の実績、利権屋どもの手から公共の利益を守ったという自信——これだけしかなかった。政権の座にあった五年間、彼は自由党を強化する努力を一切しなかった。政治ゲームが嫌いで、有権者の支持さえあればうまくいくと信じ、人間管理の政治を等閑に付した。

この点で、マッケンジーは完全に間違っていた。ユーモア雑誌「グリッブ」は選挙後、マッケンジーを評して次のように書いた。「彼は事務員のように、ただ机に向かっていただけだ。ジョン・A（マクドナルド）みたいに、人びとと会って冗談をいったり、食事をおこったり、バーテンダーとふざけたりすれば党のためにもっとよかつたのに、彼はそうせず、例のごとく奴隷のように働いていた。マック（マッケンジー）の周囲には、酒のおいもおしやべりの声もしない」

一方、酒とおしやべりと「ナショナル・ポリシー」によって、マクドナルドは一八七八年、再び政権に返り咲いた。そしてマッケンジーは、次第に忘却の彼方へ押しやられていくことになる。

二年後、自由党は、党首をマッケンジーからエドワード・ブレイクにのりかえた。マッケンジーはその後、脳卒中でからだの自由を一部失いながらも、一八九二年に亡くなるまで下院議員として留まった——やや忘れられた存在として。

一八七〇年代の主な出来事

- 一八七一年 ●カナダ連邦最初の国勢調査を実施。総人口三百六十八万九千。
- ブリテイッシュ・コロンビア州、連邦に加盟。
- 一八七三年 ●北西騎馬警察隊（のちの連邦警察RCMP）を設立。米国からバッファローの毛皮を求めて、ウイスキーを積んだ馬車に乗って侵入してきた不法者の取締りが、最初仕事であった。●プリンス・エドワード・アイランド、七番目の州となる。●太平洋鉄道疑獄が暴露され、マクドナルド内閣が総辞職。●アレクサンダー・マッケンジー内閣発足。
- 一八七四年 ●総選挙で自由党勝利。●アレクサンダー・グラハム・ベル、オンタリオ州ブランフォードで電話の原理を発明。
- 一八七五年 ●カナダ連邦最高裁判所を設置。
- 一八七六年 ●ケベック州ハリファックス間にインターコンチネンタル鉄道開通。●マニトバ州、初めて小麦を輸出。
- 米国のカスター將軍に追われたスー族五千六百人が、カナダに逃れる。
- 一八七七年 ●日本人が初めてカナダに上陸（永野万蔵）。
- 一八七八年 ●総選挙（カナダ最初の秘密投票）。●第二次マクドナルド内閣。
- 一八七九年 ●保護関税を軸とする「ナショナル・ポリシー」、議会で承認。

なぜ日本人は考古学好き？
奈良でカナダ大学院生が調査

日本人が考古学に強い関心を見せるのはなぜか。慶応大学大学院研究生として留学中のカナダ・マギル大学院生クレア・フォーセットさんが、奈良などをフィールドに、日本人の考古学に関する意識調査をしている。

カナダやアメリカでは、遺跡が直接自分たちの祖先に結びつかないことが多く、それに身近に遺跡がない。しかし、日本人は単一民族で古代と太いきずなで結ばれ、歩いたら遺跡にすぐぶつかる。これに加え、歴史と伝統を大切にする民族性によるものではと考へ、博士論文の研究課題に取り上げた。

具体的には、文化財行政や担当者の実態はどうか。どうしてこれほど関心が高いか。開発と保存の関係はどう考へるか。考古学ニュースはどのように国民に伝わるか。マスコミの役割は—などを調べており、専門家はもちろん、考古学に関係ない人も、奈良と開発が盛んな千葉で二百五十人にインタビューした。

(読売新聞奈良版、二月十七日)

サスカチュワン州の名誉市民
に東北電力と丸紅の社長

東北電力の玉川敏雄社長は、カナダ・サスカチュワン州から外国人として初めて名誉市民の称号を授与され、「同州と東北の信頼の絆(きずな)を深めることができた」と、新たな喜びをか

みしめている。

このきっかけは、東北電力が原子力発電の燃料であるウラン資源の長期安定確保を狙いに、五十五年に日本の電力会社では初めて同州のキーレイク鉱山と、二十年間の長期にわたるウラン鉱石の購入契約を結んだこと。

同鉱山は世界最大級のウラン鉱石埋蔵量を誇り、高品位のウランを産出する。

授与式では玉川社長と、商社として契約をとりつけた丸紅の春名和雄社長の二人が名誉市民称号を受けた。

(日刊工業新聞、二月七日)

バンクーバーから小学生
札幌で交歓学習や民泊

ようこそ、カナダのお友だち—白石区の東白石小学校(高橋一美校長、児童数七百九十一人)に「サケ交流」を続けているカナダ・バンクーバー市のメープルウッド小学校から三十九人の子供たちが交歓学習のために訪れ、二月七日、学校をあげての歓迎集会が開かれた。

東白石小学校は五十四年から独自のサケ学習に取り組んでおり、毎年、児童が育てたサケの稚魚を豊平川に放流している。両校は「サケおじさん」として日本でも親しまれているカナダのジム・マレーさんを通じて知り合い、



池田町がブルームボール大会

ほうき(ブルーム)とゴムボールでやるアイスホッケー—池田町が2月3日、北海道で初めて「ブルームボール」の大会を開いた。ブルームボールは、カナダで大衆的なスポーツとして人気があるが、池田町としてはカーリングと共に町民に普及したいと考えた。

(写真提供・北海道新聞)

五十八年から児童の作品などを交換。サケが結んだ縁で友好を深め合ってきた。

子供たちの相互訪問は今回が初めてで、メープルウッド小学校の六、七年生(十一—十二歳)三十九人と、付き添いのオードリー・ホップス校長らが六日夜に来札。東白石小の五、六年生に滞りながら版画などの交歓学習や市内見学を行う。(北海道新聞、一月八日)

盛岡市とビクトリア
五月に姉妹都市提携

新渡戸稲造が取り持つ縁でカナダ・ビクトリア市との姉妹都市提携の準備を進めている盛岡市は、五月に太田大三市長らがビクトリア市を訪れた際に現地で調印式を行うことになった。ビクトリア市は盛岡市出身の国際人新渡戸稲造が昭和八年に客死した地。

(岩手日報、二月二十三日)

●大西洋沿岸地方のことを、カナダの西部や中部の人々は冗談に「地の果て」と呼ぶことがあります。地図で見るとなるほど、トロントやモントリオールといった都市からはるか遠くに位置し、また実際に訪れても縲びようたる感じを免れません。

●しかし、ヨーロッパ人がおそらくカナダの有史前からタラを漁し、やがて大航海時代に至って次々と探検隊を派遣し、さらには初めて植民者を送りこんだのも、この一帯だったのです。いわばカナダ揺籃の地、というわけです。

●カナダ建国を境に、過去百年余、経済地盤が低下し、過疎化が進んで、再び歴史の檣舞台から消えたかのように見えた大西洋沿岸地方ですが、最近になってようやく明るい展望が開けてきました。この地方が「地の果て」と呼ばれなくなる日も、そう遠くないでしょう。

●本紙送付先の住所変更等についてのご連絡は、事務の都合上、ご面倒ですが、はがきでお願いします。

(吉田)

本紙中の意見や見解は、必ずしもカナダ政府またはカナダ大使館の考え方を反映するものではありません。また公式文書の翻訳は仮訳です。転載の際は、できるだけ出典を明らかにして下さい。ご意見やご希望は左記の住所にご連絡下さい。

〒107 東京都港区赤坂七丁目三—三八

カナダ大使館広報部